ROCK U!

作 趙清香

登場人物

スナ

ミレ

亜唯(あゆ)

郁ちい(いくちい)

茗子(めいこ)

穂恵美(ほえみ)

えみり

テソン

九ちゃん先生(きゅうちゃんせんせい)

もっち先生

足踏みをする音とハンドクラップ。ローテンポなロック音に合わせ亜唯、郁ちい、茗子、穂恵美、えみりが体を揺らしている。
雑然とした教室。その奥の机にスナが背中を向けて座っている。ミレが中央でスナを睨む。それに気付いたのかスナがゆっくり立ちあがる。

スナ　何や、逃げてきたんか。
ミレ　あんたと一緒にすんな。
スナ　じゃあ、何しに来たん。
ミレ　あんたを連れ戻しにきた。
スナ　…へえ。
ミレ　帰ろう。スナ。
スナ　どこに？悪いけどあたしは戻る気はない。あんたが何を言っても無駄や。
ミレ　力付くでも連れて帰る。
スナ　そんな力んでたらここじゃ生きていかれへんで。
ミレ　知るか。あんたを連れ戻すまでは意地でも我慢したる。
スナ　…相変わらずやなあ。

スナ、そう言って足をドンと鳴らす。それに亜唯たちは止まる。

スナ　ミレヤ。そろそろ本番や。あんたはこの嵐のようなロックの世界で無事に生きていけるかなあ？

スナがまた足を鳴らす。その瞬間、爆弾のようなロック音。亜唯たちそれぞれミレにぶつかり去っていく。スナ正面を向き微笑む。ミレはそれに負けじと睨み返す。
チャイムの音が鳴り響き、教室にミレとえみりが座っている。そこに茗子がやってくる。

茗子　あ、おはよう。
ミレ　おはよう。
茗子　相変わらず金さんは早いな。
ミレ　うん。早く来うへんと落ち着かんし。
茗子　慣れた？
ミレ　え？
茗子　うちの学校。
ミレ　あ、ああ。
茗子　まあそんなすぐ慣れへんよな。
ミレ　うん。
茗子　スナちゃんは溶け込むの早かったけどな。
ミレ　あいつは昔からうまいねん。そういうの。
茗子　そうなん？
ミレ　うん。

そこに穂恵美が入ってくるなり、ミレを見てけげんそうな顔をする。

茗子　おはよう。穂恵美ちゃん。

穂恵美　あーおはよう。
茗子　穂恵美ちゃん来るの久しぶりやな。
穂恵美　んー。

そう言って穂恵美、かばんに顔をうずめて寝てしまう。

茗子　すごい。来た瞬間寝るんやね。

それを見るなりミレは席を立ち穂恵美に近づく。

ミレ　相田さん。あんた学校に何しに来てるん。
穂恵美　…。
ミレ　起きいや。
穂恵美　…。
ミレ　…。

ミレ、穂恵美が枕にしているかばんを奪う。穂恵美、豪快に額を打つ。

穂恵美　いったいな、何すんねん。
ミレ　相田さんが起きひんからやろ。
穂恵美　やからってやること乱暴やな。
ミレ　学校は寝るところじゃないよ。
穂恵美　ああ、はいはい。すいません。

穂恵美はミレの手にあるかばんを取り返そうとする。ミレはすかさず遠ざける。その時誤ってかばんがえみりにあたってしまう。

ミレ　あ!ごめん。
えみり　…。
ミレ　えっと…。

隙を見て穂恵美がかばんをミレの手から取り返す。

穂恵美　ほんま、いい加減にしてくれへん。
ミレ　寝えへんて約束してや。
穂恵美　あんたさ、自分のことイタイと思えへんの。ちょっと病気なんちゃう。
ミレ　…あたしはあんたらの方がイタイわ。ようそんな風に生きて恥ずかしくないな。
穂恵美　恥ずかしいって何よ?うちはそれが普通やけど。
ミレ　…返す言葉もないわ。

そこでチャイムが鳴り、九ちゃん先生が入ってくる。

九ちゃん　はーい、おはようございまーす。今日も時間通りに来たのは金と牧野と松宮やな。あれ相田お前久しぶりやな。

穂恵美　はいはい。どうも。
九ちゃん　どういう風の吹きまわしやねん。
穂恵美　スナが来い来いてうるさいねん。そのくせあいつは遅刻してるし。
九ちゃん　あれ。本間や。あいつが遅刻とかめずらしいな。

その時スナが廊下を走ってくる。

スナ　せんせー！！！
九ちゃん　はい、おはよう。
スナ　遅刻！？
九ちゃん　はい、遅刻です。
スナ　うわもう最悪や。
九ちゃん　記念すべき朴の初遅刻。刻んどきます。
スナ　刻まんでいいです。刻むまでせんといて。
九ちゃん　いや冗談やけど。
ミレ　スナ！！

ミレがスナにものすごい剣幕で歩み寄る。

ミレ　あんた何考えてんの！
スナ　あああああ、すいません。
ミレ　遅刻するとかありえへん。
スナ　いや人間誰でも失敗することはあるでしょ。
ミレ　だいたいあんた中学卒業してからたるんでるで。昔は無遅刻・無欠席やったやん。
茗子　すごーい。
スナ　そうやったな。ごめんごめん。
ミレ　ごめんとか求めてないねん。
スナ　え、じゃあどうしたらいいん。
ミレ　失敗した分は次取り返す。これ常識やろ。
九ちゃん　長くなりそうやから先進めよかな。
ミレ　だいたいなおかしいでこの学校。朝のＨＲで三人しかちゃんと登校できてないって意味分からんで。
スナ　うん。でもこれが現実やしな。
ミレ　いらんねん。そんな現実いらんねん。
九ちゃん　実はあもう少しで文化祭がありまーす。
スナ　現実は残酷やね。
ミレ　残酷を残酷のままにしてたらあかんやろ。
スナ　そうやね。
九ちゃん　まあ例年通り名前だけの文化祭ですけどね。
ミレ　そうやねってあんた他人事か。
スナ　そういうわけじゃないけど。
ミレ　じゃあどういうわけやねん。
茗子　二人って本間仲良いんやね。
スナ　…え。

ミレ　何照れとんねん。キモいねん。
九ちゃん　じゃあまあ適当にやりたいことまとめといて。はいＨＲ終了。
九ちゃん先生はそう言って教室を出て行く。
スナ　あれ、先生何をまとめろって？
茗子　文化祭。
ミレ　え？
茗子　文化祭について考えとけやって。
ミレ　そんな大事なこと何でもっとちゃんと言わへんねん！
茗子　まあ、どうせやらんと思うけどね。
ミレ　え？
茗子　去年もあたしらのクラス棄権したんよ。ね、スナちゃん。
スナ　あーうん。
ミレ　嘘やろ。そんなん許してもらえるん。
茗子　普通やったら許してもらわれへんかもしれへんけど、許してくれたよ。
ミレ、崩れ落ちる。
ミレ　あかん。ガチでついていかれへん。
傍らスナが穂恵美に歩み寄る。穂恵美はまた寝ている。
スナ　穂恵美。
穂恵美　…。
スナ　穂恵美。
スナ、枕にしている穂恵美のかばんを奪う。穂恵美また額を打つ。
穂恵美　いったあ。何やねん。何回も。
スナ　穂恵美、文化祭があんねんて。
穂恵美　だから何やねん。どうでもええわ。
スナ　何したい？
穂恵美　だからどうでもええって。アホみたいなこと聞かんといて。
ミレ　ちょっとアホみたいって何よ。
穂恵美　またお前か。
ミレ　学校の行事サボろうなんて持ってのほかやで。
穂恵美　知らんわ。そんなん。
ミレ　ちょっとそんな言い方…。
スナ　ミレ。がっつきすぎ。
ミレ　…。
スナ　そんなんじゃここで生きて行かれへん言うたやろ。
ミレ　…。
スナ　どうせ亜唯たちがこうへんと話もまとまらんし、また後で考えよう。

一時間目を知らせるチャイムが鳴る。現代社会のもっち先生が入ってくる。

もっち先生　はーい。皆さんごきげんよう。今日も苦しい現実を嘆いて生きてますか。
スナ　はい、先生。文化祭の季節ですね。
もっち　はい、そうですね。もう何するか決めました？
スナ　いえ、相談しようにもクラスの子が全然いないもんで。
もっち　まあ、そうですね。
スナ　先生もガツンと言ってやってくださいよ。ちゃんと学校こーいって。今だって選択授業やのに五組の子ら全然こないですよ。
もっち　まあ私はこのクラスの担任でもなければ五組の担任でもないんでね。まあうちのクラスも似たようなものですよ。
スナ　…。
ミレ　…腐ってる。
もっち　じゃあ授業はじめますね。教科書六十八ページ開けて。じゃあ牧野さん読んでもらえるかな。
茗子　はい。
もっち　基本的人権の保障から。
茗子　身分制社会では、権利とは一部の人たちだけが持つ特権だった。これに対し基本的人権という考え方は人は誰も生まれながらにしてさまざまな権利を等しくもっているとする。
ミレ　腐ってるわ。
茗子　したがって人権の根底には人間の平等という考え方がある。

ミレは椅子を蹴散らすように立ちあがった。

ミレ　一つはみんなのために。みんなは一つのために。あたしが朝鮮学校に通っていた時に言われた言葉。みんなで力を合わせること。自分だけの力ではこの世の中は生きて行かれへん。特にあたしたちのような生き物は。
茗子　わたしたちの周囲には沢山の差別がある。植民地支配に由来する在日韓国・朝鮮人に対する差別。
ミレ　朝鮮学校の先生は口をそろえて言う。自分が朝鮮人であることを誇りに思いなさい。朝鮮人として胸を張って生きなさい。
茗子　その多くの者たちは就職や結婚などにおいて差別的扱いを受けている。
ミレ　周りには日本の学校が山ほどあった。それらの生徒はみんな口をそろえて言う。　やーい、朝鮮学校、ボロ学校。
茗子　それを改めるには、一人ひとりが人権に対する認識を強く持ちつつ、積極的な努力を日常的に地道におこなっていくことが大切である。
ミレ　あたしはそこで生きてきた。ボロ学校と言われる学校で生きてきた。そこで生きることがあたしの使命やった。だってあたしたち在日学生はそこで生きることだけが希望やったんや。
スナ　違う、やろ。
ミレ　！
もっち　どうしたん。金さん。急に立ちあがって具合でも悪いん？
ミレ　え、ああ、いえ。
もっち　そう？じゃあ良かった。

ミレはスナを見る。スナもミレを見ている。その時ドアが勢いよく開く。

郁ちい　遅れてすんませーんぬ！
茗子　郁ちいさん。おはようございます。
郁ちい　おはよう。めいめい。
スナ　郁ちい。
郁ちい　はっ！ち、違うで。ね、寝坊してんで？
スナ　あんたはいっつも寝坊すんねんな。亜唯は？

遅れて亜唯が入ってくる。

亜唯　今日は早く来た方やろ。
スナ　うん。でも遅刻。
茗子　今日はスナちゃんも遅刻したんですよ。
亜唯　はっ。一緒やんけ。
スナ　きょ、今日はたまたまや。めいも余計なこと言うな。
郁ちい　あれあれ。スナより強烈な真面目ちゃんが今日は突っかかってこうへんな？
ミレ　…。
郁ちい　なあなあどうしたん。電池切れ？
もっち　来たんなら席に着きなさい。
郁ちい　金さーん。
ミレ　腐った世の中に絶望しとんのや。
郁ちい　あーそれ郁もよう思う。
ミレ　どいつもこいつもクズばっかり。
郁ちい　うんうん。クズであふれかえってるよ。この世の中は。
ミレ　何でやねん。
郁ちい　え、何もボケてないで。郁。
ミレ　何でその中であたしらがもっとクズ呼ばわりされなあかんねん。
郁ちい　？まあよう分からんけど。頑張り？な。
ミレ　やからキライやねん。
郁ちい　何が？
ミレ　お前ら日本人が嫌いや言うとんのじゃボケ！
スナ　ミレ！
ミレ　だいたい何やねん。どいつもこいつもナメとんのか。ナメてるやろ。
茗子　金さん。落ち着いて。
ミレ　何やねん。学校はまともにこうへん。来てもやる気なし。あげくに先生までもやる気なし。
スナ　ミレ、やめって。
ミレ　スナはようこんなとこに入りたいと思ったな。感心するわ。
スナ　違って当たり前やーん。ここはもう朝鮮学校じゃないんやし。
ミレ　知るか、そんなん。自分ら恥ずかしくないん。
郁ちい　ええ？恥ずかしいって何があ？
ミレ　そうやって何も考えんと生きてんのが恥ずかしくないんかって聞いてんねん！
郁ちい　だってこれが普通やし。金さんの方があ見ててしんどそう。

ミレ　あたしの何がしんどそうやねん。
郁ちい　そうやって殻に閉じこもってちゃだーめ。もっと解放的になろーや。
ミレ　あんたみたいに？それはな解放的になってるんじゃなくてただアホになってるだけって言うねん。
スナ　こら、ミレ。確かに郁ちいはアホやけどな。
郁ちい　おいおい。
スナ　アホになれるって素晴らしい才能やねんで？
郁ちい　そうやそうやー。
ミレ　…。スナは…。
スナ　？
ミレ　スナはつまらん人間になったな。なんであたしここに来たんやろ。

その時亜唯が近くの椅子を蹴飛ばす。

亜唯　じゃあ帰れや。

場がしーんと静まりかえる。

亜唯　そんなに朝鮮学校が恋しいんやったら帰ればええ話とちゃうん。いちいち転校してこうへんくてもさ。
郁ちい　ちょっと亜唯ー。穏便に行こうや。
亜唯　気が向いたから来たのに。めっちゃテンション下がったわ。

亜唯はそう言ってかばんを持つと出ていこうとする。

スナ　亜唯！

スナの声に場が静まりかえり亜唯は足を止める。

スナ　あのさあ。
一同　…。
スナ　…文化祭があんねんけどお、皆なにしたい？
もっち　言うのおそなったけど、今授業中ね？
スナ　なああなあ亜唯。何したい？
亜唯　どうでもいい。
スナ　そう言わずにさあ。
郁ちい　はいはい。郁、食べもん食べたーい。
スナ　じゃあ何か店出す？
亜唯　はあ。
スナ　なああなあミレ何したい？

ミレは咄嗟に教室を出て行く。

もっち　ちょっと金さん。どこ行くの。
郁ちい　あらら。

亜唯　何やあいつ。
茗子　金さん。大丈夫かな。
スナ　大丈夫やって。ちょっと難しい子やけど。
亜唯　ああいうのうち本間に無理。
スナ　慣れてないんよ。あんたらみたいな子。
亜唯　あんたらみたいって何やねん。
スナ　あいつ総連系の生まれやから。
茗子　そうれん？
スナ　朝鮮学校を作った組織のこと。先祖がな。だからあいつの周りには今まで在日しかおらんかった。

雨がしとしとと降っている。
みんなが帰っていく。えみりが帰る準備をしているところにミレが戻ってきて、一人席に座る。

ミレ　はあ。
えみり　…しとしと。
ミレ　え？
えみり　しとしと、しくしく。誰かが泣いてるんかしら。
ミレ　あ、の…？
えみり　ああ。

えみりはいきなりミレに顔を近づける。

えみり　あんたのことか。

えみりが出て行く。ミレが混乱していると、そこに茗子が入ってくる。

茗子　金さん。
ミレ　…。
茗子　金さん。
ミレ　え、ああごめん。
茗子　今日のこと気にしてる？
ミレ　…。
茗子　そりゃあ気にするか。
ミレ　牧野さんは、変わってるな。
茗子　え？
ミレ　牧野さんだけや。まともなん。
茗子　うち別にまともじゃないよ。
ミレ　でも他の子に比べたらちゃんと学校も来てるし。まともやん。
茗子　…金さんは何で転校してきたん。
ミレ　え？
茗子　スナちゃんと関係ある？
ミレ　…。
茗子　…うちな。志望校全部落ちてん。

ミレ　え？
茗子　高校受験の時。元々本番に弱いねんけど、こんな時まで働かんでいいよな。行きたい高校全部落ちてもうて。滑り止めの滑り止めのこの高校来た。
ミレ　…。
茗子　しんどかった。
ミレ　…そやんな。
茗子　しんどくてさ。何も手につけへんくて、そしたらな。スナちゃんが話しかけてくれてん。
ミレ　スナが？
茗子　うん。いきなり耳元で牧野さーんって。
ミレ　うざ。
茗子　ふふ。でも不思議。スナちゃんてすごいんよ。自分のことばんばん話すねん。隠してててもうっとうしいからって。自分が在日やとか、朝鮮学校行ってたとか。
ミレ　…。
茗子　色んなこと話してくれた。いっぱい励ましてもらった。言い方おかしいけどスナちゃんと話してるとな。すーって消えていくねん。自分のなかにある黒いもん全部。
ミレ　…うん。知ってる。
茗子　うちスナちゃんのこと大好きや。
ミレ　うん。
茗子　金さんも、やろ？
ミレ　あたしは…。
茗子　だからスナちゃんを追いかけてきたんやろ。
ミレ　あたしは…。

雨の音が強くなる。時折風も吹いている。
次の日のＬＨＲの時間。スナが教卓に立っている。

スナ　はーい。で文化祭のことやけど。出店がいいってのがめい一人と、後は何か？やる気なしか。
郁ちい　棄権したらよくないっすか！
スナ　あんた昨日何か食べたいって言ってたやん。
郁ちい　それはその場のノリっちゅうやつやな。
スナ　亜唯は？
郁ちい　亜唯はいつものモードに入ってまーす。

亜唯は音楽を聞きながら体を揺らしている。

亜唯　♪（Ｍを歌っている）
郁ちい　♪（亜唯と共に歌ってる）
穂恵美　うるさいな。寝られへんやろ。
スナ　お前は少しの間くらい起きとけよ。えみりはどう思う？
えみり　…。
スナ　どう思う？
えみり　しとしと…。

スナ　え？
えみり　…わたしのことよりしとしと降ってる雨を心配したら。
スナ　…。
亜唯　♪～。
茗子　歌…歌は？
スナ　歌？
茗子　体育館での舞台発表もあるやろ。そこで歌うねん。
郁ちい　へえ。こんな学校にそんな大層なもんがあんねや。
スナ　まあ毎年誰も発表してへんみたいやけどな。
郁ちい　何じゃそれ。廃止しろよ。な、亜唯。
亜唯　♪～。
穂恵美　うるさいわ。亜唯ら！
スナ　なあ、穂恵美は？
穂恵美　あ？
スナ　文化祭何がしたい？
穂恵美　てかスナ今年妙にやる気やな。
スナ　去年はみんなが自由奔放すぎてついていかれへんかったの。
穂恵美　ほんまかいな。
スナ　あたしは行事がある以上はやるよ。みんなで思い出作りたい。
穂恵美　よう言うわ。
スナ　でどうなん。今な、めいが歌、歌ったらどうやって言ってる。
穂恵美　歌…な。
スナ　うん？
穂恵美　…ロック。
スナ　ロック？
穂恵美　ロックやったら歌ってもいい。
スナ　はいはい。皆こっち集中！
郁ちい　えー何？
スナ　今穂恵美から意見もらってんけど。ロックてのはどうよ？
亜唯　うわ。スウきも！
スナ　キモいってなんやねん！
茗子　ロックですか？
スナ　うん。そういや穂恵美はバンドしてるもんな。
穂恵美　ちょっ！
茗子　そうなん？初耳。
スナ　ギターとか弾けるんやろ。生演奏してもらお。
穂恵美　ちゃうわ。うちはキーボード。
スナ　そやったっけ。
穂恵美　本格的にやるんならもっと楽器あった方がええで。
スナ　そうやなあ。誰か楽器できる人おらん？
郁ちい　はい、ハーモニカ吹けます。
スナ　ロックやて言うてるやろ。
亜唯　ロックは難しいやろ。
茗子　そうかなあ。
亜唯　てかうちは出えへんけどな。

スナ　亜唯。

スナは亜唯に近づく。

スナ　たいしたことしようって言ってるんじゃないやん。ただ皆で舞台出たいなあってだけ。
亜唯　でもめんどいことには変わりないやん。
スナ　そやけどさあ。思い出作りやと思ってさあ。
亜唯　思い出…。
スナ　うち、こういうの好きやな。朝鮮学校おったころは民族の心得がなんたら～で片っ苦しいもんばっかやったから。こうやって何もしがらみ無しで行事出来んのってめっちゃ楽しい。
亜唯　…。
郁ちい　スナってえ。本間時々めっちゃ恥ずかしいこと言うよな。こっちが照れる。
スナ　郁ちいはいつも恥ずかしいよ。
郁ちい　あはは。
スナ　笑うとこちゃうけどな。
亜唯　でも無理やな。時間ないし。
スナ　ちょっとでもあかん？あんま時間とらんからさ。
穂恵美　てか亜唯は何がそんな忙しいん。
亜唯　色々あんねん。
穂恵美　色々って何よ。
亜唯　色々は色々や。
郁ちい　いろはにほへと。
亜唯　ちりぬるを。て何でやねん。
スナ　じゃあ亜唯は助言くれるだけでいいよ。亜唯はなかなか説得力あるからな。
亜唯　…。
茗子　何かスナちゃんって亜唯ちゃんにだけ甘いよね。
スナ　そんなことないよ。ただ亜唯には絶対参加してほしいねん。
亜唯　…うち、あんま手伝われへんけど。出来る範囲ならやるわ。
スナ　いやったあああ。
亜唯　うるさいわ。
スナ　亜唯。いっぱい思い出作ろな。なっ。
亜唯　うん。
穂恵美　はあ。スナ。
スナ　ん？
穂恵美　バンド仲間、呼ぼか？
一同　マジで？

ミレはスナを見ている。皆スナの輪に集まっている。そこでチャイムが鳴る。

九ちゃん先生　はーい。皆文化祭の話しあいは終わったかな。
スナ　決まりましたあ。
九ちゃん先生　はい。おっけい。
スナ　先生。決まったからには先生もやる気出してくれないと困りますから。

郁ちい　そうやで。九ちゃん。競馬行ってる暇ないで。
九ちゃん先生　まいったな。
スナ　先生、絶対ですよ！
茗子　やる気やね。スナちゃん。
スナ　当たり前やん！

雨が強く降っている。ミレを残してみんなが教室を出る。
誰もいない放課後の教室でミレが座っている。ミレの携帯が鳴る。

ミレ　もしもし。あっテソン。うん、うん。え、明日？うん大丈夫やと思う。え、何。　何もないよ。ちゃんとやってる。うん。じゃあ、な。

ミレが携帯を切ったほぼ同時くらいに穂恵美が入ってくる。

穂恵美　あれ。帰らんの。
ミレ　あ、帰るよ。
穂恵美　あっそう。

穂恵美は自分の机の中に手を突っ込み折りたたみ傘を取る。

穂恵美　あんた今日おとなしかったな。どうしたん。
ミレ　別に何もないけど。
穂恵美　スナとも話さんと、今日のあんた気味悪かったで。
ミレ　別にええやろ。どうでも。相田さんは相変わらず寝てばっかり。
穂恵美　…あんたとスナ何が違うか、教えたろか。
ミレ　え？
穂恵美　スナは誰に対しても一緒。何も変わらん。あんな裏表ない奴初めて見た。
ミレ　……知ってるよ。
穂恵美　うちら、学校ってめんどいねん。うっとおしい。しんどい。あれしろ、これするな、うるさいしさ。好きなことやってる時が一番好き。
ミレ　…。
穂恵美　あんただってほんまは嫌いやったんやろ。

その時雷が鳴る。雨が強くなる。
翌日の放課後、教室に残って準備をする生徒たち。

スナ　だからさあ、ただ歌ってるだけじゃオモんないやん。
茗子　そうやねえ。
スナ　なんかこう踊り入れるとかさあ。
穂恵美　え、誰がふりつけんの。
スナ　いや、本格的じゃなくて何かライブのノリみたいなさ。
茗子　うーん。
スナ　たとえばさあ。
亜唯　なあスウ。そろそろ…。
スナ　ああ、うん。

亜唯が教室を出る。廊下を歩くとミレがちょうど廊下を歩いてきた。

ミレ　…あれ、帰んの。
亜唯　うん。ちょっと用事がな。
ミレ　用事って？
亜唯　何でもええやろ。いちいち突っかかってくんなよ。
ミレ　…。
亜唯　なに。
ミレ　別に。
亜唯　自分、見てたらイライラする。
ミレ　え？
亜唯　あれこれうるさい割には深くまでは絡んでこうへん。何なん。それ。あたしは皆とは違いますってやつ？
ミレ　何言ってんの。
亜唯　自分は在日やから、あんたらとは違うって。
ミレ　…！
亜唯　自分だけがかわいそうって思ってるやつ、うち大嫌いや。在日なことがそんなにかわいそうなことかよ。
ミレ　あんたには分からんわ。いっつもいい加減に生きてるあんたに何が分かるんや。
亜唯　うちだってなあ。うちだって好きでこうなったんじゃないねん。

亜唯は舌打ちをしながら不機嫌に去っていく。
二人の話を聞いていたえみりが教室に戻り、続いてミレが入って来る。教室は何かと盛り上がっている。
えみりだけがミレを見ている。

茗子　すごーい。郁ちいさん上手。
郁ちい　そうやろ。敬いなさい。褒めたたえなさい。
スナ　だからこうタオル振りまわしてさ。
穂恵美　ああ、なるほどな。
スナ　タオルも自分らで作ろうや。
穂恵美　じゃあデザインはさ、こんな感じで…。
えみり　亜唯の言ったこと。
ミレ　えっ。
えみり　図星。その通り。スナとは大違い。
スナ　あ、ミレおかえり。
ミレ　あ、ただいま。これ…。

ミレは持ってきたものをスナに見せる。

スナ　ありがとう。なあ、ミレ見て。だんだん方向も決まってきたで。
ミレ　…。
スナ　ミレ？疲れた？

ミレはスナに持ってきたものを投げつけた。

ミレ　うるさい！
スナ　…。
ミレ　何が違うねん。あたしとスナの、何が違うねん。
スナ　ミレ…？
ミレ　あんたはいつだってそう。朝鮮学校おった時もそうやってへらへら笑って。人の気持ちかき回すだけかき回してあとは知らん顔やもんな。
スナ　知らん顔って。
ミレ　そうやん。あたしに…あたしに何も言わんと…。
スナ　…。
ミレ　いきなりいなくなりよってー！
スナ　…うん。
ミレ　どんだけびっくりしたと思ってんねん！
スナ　ごめんな。
ミレ　謝らんとってよ。
スナ　…。
ミレ　…帰ろうや。
スナ　どこに？
ミレ　あたしらの学校に帰ろうや。
スナ　あたしの学校はここ。
ミレ　何でやねん。何が嫌になったん。何で朝鮮学校が嫌になったんや、スナ。

スナはミレが投げたものを拾う。

スナ　嫌いになったとかじゃないねん。そういうんじゃない。
ミレ　じゃあ、何で。
スナ　…疑問に思ったから。みんなは一つのために。一つはみんなのために。朝鮮学校の先生たちから呪いのように教え込まれた言葉。でもどんなにその精神を持ったって未だに祖国は統一せえへんし、あたしらに対する差別はなくなってない。
ミレ　…。
スナ　朝鮮人であることに誇りを持ちなさい。自分の血に恥じない生き方をしなさい。　差別のあふれるこの国でそんなことができるもんかってちゃんちゃらおかしかった。そんなことをさも当然のように言う先生らもおかしかった。
ミレ　…。
スナ　あたしはあたしを認めてくれる場所が欲しい。在日やからとか関係なく。あたしは、あたしという人間を認めてほしい。
ミレ　…。
スナ　あたしらと日本人…それを隔ててるもんて何やろ。それが知りたかった。
ミレ　…。
スナ　なあ、ミレ。みんなが一つになるっていうのはさ。どういうことなんかな。差別とか国籍とかそんなん関係なしにただ一人の人間としてあたしは…。
ミレ　スナ…。

スナ　朴スナとして堂々と生きたい。

沈黙の後、ミレがつぶやく。

ミレ　じゃああたしは…。あたしはどうやって生きたらええねん。

その時ミレの携帯が鳴る。ミレは携帯に出る。

ミレ　え、ああ、そうなん。分かった。

ミレは携帯を閉じると教室を出て行く。

茗子　…今日はもう帰ろか。
スナ　ごめん。
茗子　いいよ。全然。

茗子と穂恵美は帰り仕度をする。

穂恵美　じゃあ。
茗子　また明日な。
郁ちい　ばいばい。
スナ　うん。バイバイ。

穂恵美と茗子郁ちい、えみりは教室を出て行く。スナは二人を見送ったあと、どこか遠くを見つめる。そして何を思ったのか教室を出て行く。そこにミレとテソンがやってくる。

ミレ　いちいち学校にまで来てくれやんでもいいのに。
テソン　大丈夫。今日暇やったしな。あとミレの通ってる学校も見てみたかったし。それにしても…。
ミレ　…ひどいやろ。
テソン　ほんまさ。ゆとり教育かどうか知らんけど俺らゆとり受けてない人間からしたら甘ったれてるよな。
ミレ　…うん。そやな。
テソン　あれ、今日はノッてこうへんの。
ミレ　あんまそういう気分じゃない。

その時、スナが廊下側の窓から顔を出す。

テソン　めずらし。スナは?元気?
ミレ　…うん。
テソン　…スナを追いかけていったんやろ?
ミレ　…うん。
テソン　喧嘩でもした?
ミレ　……うん。

テソン　ミレのアボジから連絡きた。俺からも朝鮮学校戻るように言ってくれへんかって。
ミレ　カンカンやもん。
テソン　でも分からんな。いくらスナと仲が良かったからって追いかけていくなんて思ってもなかったわ。ちょっとびっくり。
ミレ　…。
テソン　日本人とは分かりあわれへんいうてたのに。
ミレ　…。
テソン　それとも何か他に理由でもあんの。
ミレ　あたしは…。
テソン　何？
ミレ　何か、よう分からん。あたし何してんねやろ。こっちの人間にはついて行かれへんし、スナとは喧嘩するし、アッパはうるさいし。何がしたかったんか自分でも分かれへん。
テソン　何かミレがそういうこと話すのめずらしいな。
ミレ　そうかな。…そうかも。あんまりこういうこと考えたことなかった。
テソン　考える暇、ないしな。
ミレ　考えてもどうにもならんかったしな。
テソン　朝鮮高校のみんな、お前のこと心配してた。スナだけじゃなくミレまでおらんくなったって。
ミレ　うん。
テソン　悪い事言わん。戻ってこいよ。お前が朝鮮学校敵に回すことないて。
ミレ　あたしって朝鮮学校敵に回したんかな。
テソン　当たり前やん。日本学校行った生徒を朝鮮学校は目の敵にする。そんなんお前が一番分かってたことやろ。
ミレ　こっち来る時凄い反対された。
テソン　そやろ。朝鮮学校敵に回したら、お前のアボジが黙ってないって。
ミレ　あんたの話したいことってそのこと？
テソン　俺からもお前の父さんに謝るし。いとこの俺から言ったら聞いてくれるかもしらんし。
ミレ　…。
テソン　ミレ。

その時スナが教室に入ってくる。

スナ　ぬおおお、竹島は誰のものでもない竹島だけのものじゃキーック！！

スナのキックがテソンにもろに当たる。

テソン　いった、何で竹島！？
スナ　久しぶりやな、テソン。何で竹島やと、それは竹島が竹島やからや。
テソン　何言ってんの、お前。独島は朝鮮の領土や。
スナ　そんなん激しくどうでもええわ。竹島はな、竹島だけのものやねん。勝手に決めるなボ、ケ、え、え、え、。
テソン　う、わ、あ、あ、あ、…。

スナ、テソンを殴る。テソンが不意をつかれて顔面にパンチを受け、崩れ落ちる。

スナ　ミレだってなあ！誰のものでもない、ミレはミレだけのものや。ミレの決めたことをいちいち文句言うな。

ミレ　…。

テソン　…相変わらずやなあ。

テソン、立ちあがる。

テソン　ミレのために来たのに何でこんな目にあってんねやろ、俺。

スナ　黙れ、今すぐ出ていけ。

テソン　一瞬で嫌われたな、俺。

ミレ　あはは。

テソン　いや、笑うとこちゃうで。

スナ　黙れ。今すぐ出ていけ。

テソン　はいはい、出て行きます。すいません。

テソンはかばんを持って出て行こうとする。が、振り返りミレを見る。

テソン　ミレヤ。せめてアボジとだけはちゃんと話しいや。

テソンはそう言って出て行く。ミレはスナを見る。スナもミレを見る。スナがにかっと笑う。それを見てミレは吹きだす。

ミレ　何か昔もこんなことあった気がする。

スナ　ええ？

ミレ　小学校の時日本学校の小学生に馬鹿にされた時。

スナ　ああ、そんときはそいつらにキムチ投げたった。

ミレ　キムチくさって言われたからな。

スナ　うん。キムチ食べたいんかなと思って。

ミレ　あん時はびっくりしすぎて笑ってもうたわ。あとは、大の大人に北朝鮮！言われた時。

スナ　ああ、あったな。

ミレ　二人で北朝鮮の国歌歌ったもんな。

スナ　うん。ロック調にな。

ミレ　何でロック調になったんやっけ。

スナ　覚えてない。その場のノリや。

ミレ　あはは。

スナ　あはははは。

ミレ　…スナ。

スナ　んん？

ミレ　ごめんな。

スナ　…あたしも、ごめん。あんたにだけはちゃんと言っとけばよかったわ。

ミレ　…スナは、スナはもう戻る気はないねんな。

スナ　あたしもあんたと一緒や。朝鮮学校で生きてきた人間や。普通の人とは違う存在かも知らん。でも…。
ミレ　…。
スナ　あんたは何でここに来た？
ミレ　…。
スナ　何かに縛られんのは辛い。なあ、ミレ。あたしらもうそろそろ自由になってもええやんか。

風がごおっと吹いている。窓がみしみしと音を立てる。
スナが鞄をとって教室を出て行く。
教室にぽつんといるミレ。

ミレ　もうそろそろ自由になってもいい、か。

数日後の放課後。文化祭の準備も大詰めだ。穂恵美はキーボードを弾いている。

茗子　穂恵美ちゃん。昨日穂恵美ちゃんのバンド仲間と合わせたとこもう一回教えてもらっていい？
穂恵美　ああ、ここは…。
郁ちい　スナー。衣装こんなんでどお？
スナ　かわいい。やばい！
亜唯　スウ、ちょ、こっち来てー。
スナ　はいはーい。

自分の仕事をしながら一人でいるミレ。そこに茗子が話しかける。

茗子　金さん！
ミレ　え？
茗子　文化祭楽しみやな。がんばろな。

ミレはそれを聞いて何かを決心したように立ちあがる。

ミレ　あたし…！

その時、九ちゃん先生が入ってくる。

九ちゃん　おい、みんな。まだおるな。
郁ちい　どうしたん。九ちゃん。
九ちゃん　舞台…中止なるかもしらん。
スナ　え？
九ちゃん　その色々あって。
茗子　どういうことですか。
亜唯　ちょ、説明してや。
九ちゃん　今回の舞台お前らだけしか出えへんねん。どこのクラスもやる気なくて。
スナ　だから…やる意味ないって？

九ちゃん　まだ、決まったわけじゃないけど。
穂恵美　決まったわけじゃないなら九ちゃんから抗議してや。
九ちゃん　いや、でもな。もし仮に舞台できるにしても、客がおらんようじゃどうにもならんやろ。
郁ちい　じゃあ諦めろって。
亜唯　何で今になって言うん。
九ちゃん　ぎりぎりまで様子見ようってことやってんけど。こればっかりはしょうがないなって。
スナ　嫌や。
茗子　スナちゃん。
スナ　中止になってもやるよ。あたし。
茗子　うちもやるよ。
スナ　先生からも言ってください。せめてやるだけやらしてくれって。宣伝ももっと頑張るからって。
九ちゃん　…でもな。
亜唯　スウ、無駄やって。言ったって一緒やって。
郁ちい　何かテンション下がっちゃった。本気になっててアホみたい。
スナ　郁ちい。
穂恵美　無駄やろ。こんなやる気のない人間らに何言っても一緒やって。
亜唯　そもそも、先生らがやる気ないから生徒もやる気ないんやろ。
郁ちい　そうだと思いまーす。
穂恵美　何となくこうなるって予想してたけどな。
スナ　穂恵美。バンド仲間にまで協力してもらったのに。
穂恵美　ちょっと本気になったらすぐこれ。もうガチで学校やめよっかな。うち。
ミレ　なあ！

ミレがいきなり大きな声を上げる。皆ミレを見る。

ミレ　…やろうや。
亜唯　あ？あんたは黙っとけよ。
スナ　亜唯！
亜唯　今度は何？行事途中で投げ捨てるなんて朝鮮学校ではなかったって？
ミレ　うん。なかった。みんなやる気のある真面目な子ばっかりやった。
亜唯　あっそう。
ミレ　あんたらとは背負ってるものが違うねん。
亜唯　知ったこっちゃないわ。
ミレ　あんたあたしに言ったよな。好きでこんなんなったんちゃうって。それな、あたしだってそう。あたしだって好きで朝鮮人なわけじゃない！
亜唯　…。
ミレ　あたし、逃げてきてん。
茗子　え？
ミレ　民族も国も何もかんも嫌になって逃げてきてん。自分の民族に誇り持てって、その言葉うっとおしくなって逃げてきた。逃げたら何かが変わると思ってた。
一同　……。
ミレ　あたしも…。あたしだけを理解してくれる場所が欲しかった。総連系とか在日

とかそんなん関係なしに、金ミレとして認めてくれる場所が欲しかっただけやねん。

スナ　…ミレ。

ミレ　でも、いざここに来た時やっぱり違うって思った。日本人には差別しか受けてこうへんかったからそこにこだわって。みんなとあたしは違うんやってそればっか気にして。皆と打ち解けようともせえへんかった。

一同　…。

ミレ　でも、みんなだってつらいことくるしいことといっぱいあるやろ?どこにも居場所がなくて涙止まれへん時、あるやろ?

茗子　……うん。

ミレ　みんな、一緒やもんな…。

茗子　…うん。

ミレ　みんなと一緒に文化祭出たい。

茗子　うん。

ミレ　あたし、がんばるから。がんばるから。

しばらく沈黙。スナがにかっと笑って、ミレの背中をバシンと叩く。

スナ　めそめそすんな!そんなんじゃロックは歌われへんで!

ミレ　めそめそしてないもん。

スナ　…先生。あたしらがんばるから文化祭やらせてください。お願いします。

茗子　うちからもお願いします。

九ちゃん　…。

亜唯　みんな一緒…な。

郁ちい　みんなみんな生きているんだ。友達なーんだあ。

穂恵美がポーンとキーボードを鳴らす。

穂恵美　変な奴やな。あんたもスナも。

郁ちい　いっちょやりますかあ。

亜唯　勝手にしろ。

九ちゃん　校長に言ってみるわ。ダメもとやけどな。

スナ　ダメもとじゃない!お願いします。

九ちゃん　うん。そやな。

九ちゃん先生出て行く。皆、また作業に取り掛かる。一人亜唯だけ机に腰かけている。

亜唯　あんた。

ミレ　…え。

亜唯　強いねんな。あんたもスナも。

ミレ　そんなこと、

亜唯　うちさあ。妹が病気でさあ。親おかんしかおらんねんけど、病院に付きっきり。　おかん仕事で忙しい時うちが妹の面倒見てる。でも、そろそろ限界かな。

ミレ　…。
亜唯　うち、この文化祭終わったら学校やめる。
ミレ　え？
亜唯　このことスナしか知らんから。
ミレ　そんな…。
亜唯　ほんまはもっと早くやめるつもりやってんけど何でやろ。あんたもスウもうっとおしいくらい絡んでくるし、うちの負けやわ。
ミレ　…。
亜唯　みんなー緒か…。そやんな。みんな辛くて苦しくて。一人じゃ生きて行かれへん弱い人間や。

亜唯はそう言って作業に戻る。ミレはしばらくボーっとした後携帯を取り出す。

ミレ　テソン…。あたし。あのな。

場面がブルーになり、ローテンポなロック音。文化祭前日。

郁ちい　文化祭ぜん・じつ！
スナ　俄然気合い入ってんなあ郁ちい。
郁ちい　当たり前！
穂恵美　最後にちょっと音合わせしとく？
茗子　何か今から緊張してきました。
亜唯　はやいやろ。
スナ　これでちゃんと文化祭ができたらええねんけど。
茗子　スナちゃん！

ミレ、九ちゃん先生と共に教室に入ってくる。

ミレ　みんな！文化祭が…。
郁ちい　何！？やっぱあかんかった？
九ちゃん　ＯＫ、出たよ！
穂恵美　嘘…。
スナ　やったあああ。
ミレ　先生が頼み込んでくれてん。
郁ちい　九ちゃん、いいとこあるやん。
九ちゃん　はあ、もう二度と勘弁な。

皆笑い合う。

ミレ　スナ…。

ミレはスナの手を引いて皆の輪から外れる。

ミレ　スナ…あたし朝鮮高校行ってくる。行ってちゃんと挨拶してくる。
スナ　…そっか。

ミレ　皆に伝えてくる。居場所見つけましたって。
スナ　うん。
ミレ　今からでも行って来る。
スナ　随分早まるな。
ミレ　うん。いてもたってもいられへんねん。朝鮮学校の子ら、ぶちまかしてくるわ！

ミレは走って教室を出て行く。皆が不思議そうに見ている。

郁ちい　ミレポンどうしたん。
スナ　んー何かぶちまかしてくんねんて。
亜唯　何やそれ。
えみり　あ。
茗子　えみりちゃんどうかした？
えみり　聞こえる。
茗子　え？
えみり　嵐のような…。

ロック音が響く。

スナ　そうやで、みんな。この場所でのロックは始まったばっかりや。

ロック音が大きくなる。穂恵美がキーボードを弾きならす。皆エアギターの真似をしたり体を揺らす。それを眺めるミレ。

ミレ　嵐のようなやつや。人の魂を揺さぶって悲しみも苦しみも跡形もなく消していく…嵐のような、そんな……。

スナ、ミレを見て微笑む。ミレもスナを見て微笑む。笑い合うと同時に拳を突き上げる。うるさいくらいのロック音が彼女たちを包んでいた。